

南アフリカは大きな実験室、研究素材の宝庫

アフリカ南端の共和国に、日本人はどのようなイメージを持っているだろうか。

「考古学から最新電波天文学まで ZA Living Laboratory」は、南アフリカの科学技術に触れることができる貴重な場だ。初出展の狙いを同国在京大使館のユディ・マブーザ科学技術担当公使はこう話す。

「わが国はアパルトヘイト（人種隔離政策）が撤廃されてから今年で20周年を迎えます。故ネルソン・マンデラが大統領に就任したのを機に、白人以外の人種も等しく教育を受けられるようになり、ここ数年で飛躍的に科学技術力が高まっています。わが国には、科学技術における地理的な優位性があります。そんな南アフリカ共和国の科学技術の最前線を日本の皆様にもご紹介したいと考えました」。

見どころは、近年発掘された3億年以上前の猿人の頭蓋骨のレプリカと、大型電波望遠鏡「SKA」の模型だ。国際プロジェクトが建設するSKAは、約3,000個のアンテナで宇宙を観測する電波干渉計で、2020年ごろから観測が始まる。同国

は南半球に位置し、観測の妨げになる人工的な電磁波などが少ないことから建設予定地に選ばれ、以前から、天文学に関する国際的な研究・観測拠点となっている。展示ブースでは、大がかりな「SKA」の仕組みなどを担当者がわかりやすく解説してくれる。

同国は、世界の白金の生産量の約90%

を占めるなど地下資源に恵まれている。白金は燃料電池や触媒などに不可欠な元素で、水素社会づくりに力を入れている。

会場では、同国の経済発展と環境配慮を両立する水素社会を紹介してくれる。また、ブースで同国の科学技術関連のミニワークショップも行われる。南アフリカのイメージが変わりそう。



大型電波望遠鏡「SKA」のミニチュアを持つマブーザさん。7日15：30からのキーノートセッション（未来館7階）にも登壇する。